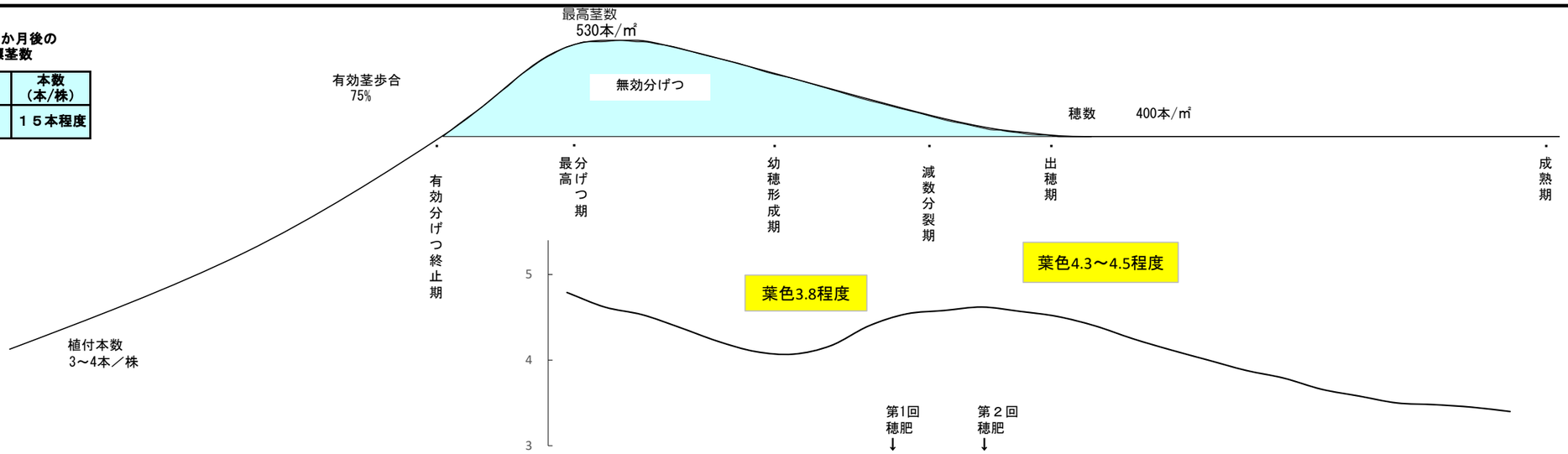
「新大正糯」の栽培ごよみ

収量構成の目安

収　量　構　成	目　安
㎡当り最高茎数（本）	530
有効茎歩合　（%）	75
㎡当たり穂数（本）	400
平均一穂粒数（粒）	70
㎡当たり着粒数（百粒）	280
登熟歩合　（%）	80
玄米千粒重（g）	21.5

田植え1か月後の目標茎数

植付株数	本数（本/株）
７０株	１５本程度



月	4　月	5　月	6　月	7　月	8　月	9　月	10月
草刈時期	★	★	★	★	出穂　←本田防除以降、収穫までは草刈りをしない→		★
生育期区分	育苗期	田植期　活着期　有効分げつ期	無効分げつ期	幼穂形成期 出穂23日前　穂ばらみ期 出穂10日前	登　熟　期	収　穫　期	

管理作業

- やや深水（４～５㎝）
- 浅水管理（２～３㎝）
- 軽めの田干し
- 除草剤散布時は深水を保つ
- 中干しの徹底
- 間断かん水
- 幼穂形成期以降は飽水管理（足跡の水が切れないように管理）
- 出穂から20日間は湛水状態を保つ
- 落水を急がない

栽培管理のポイント

- 稲わらの腐熟を促進するため、秋起しを行い、排水溝を設置する
- 土づくり肥料はそれぞれの基準量を確実に施用する
- 土づくりに努める
- 穂発芽しやすいので倒伏・刈遅れに注意
- 適期内に刈取り、刈遅れの無いように注意する
- 収穫前に必ずクサネムやヒエなどの雑草を抜き取る
- フェーン時はかん水して、葉身の萎れを防ぐ
- 刈取り予定日の5～7日前まで間断かん水する
- 圃場全体に水が行きわたっているか確認する
- 湛水期間はこまめに水を入れ、田水温の上昇を防ぐ
- 穂揃期の葉色を　4.2　～　4.5　に誘導する
- 出穂から　20　日間は湛水状態を保つ
- 2回目穂肥は1回目の7日後に確実に行う
- 本田防除の徹底（適期防除の実施）
- 1回目穂肥は幼穂長　10　～　20　㎜　を確認してから慎重に行う
- 幼穂形成期以降は抱水管理（足跡に水が切れないように管理する）
- 幼穂形成期の葉色を　3.8　程度に誘導する
- 畦畔草刈りでカメムシ密度を下げる
- 中干し後は間断かん水を繰り返し土壌を固くする
- 中干し（田植後4週間までに開始する）
- 適正な中干により、根の活力を高めるとともに過剰分げつを抑制する
- 田植後4週間までに溝堀利を行い、水のかん排水の効率化を図る
- 除草剤散布は適期に行い、散布後5日間は湛水状態を保つ
- 良質の茎を早く確保する
- 活着後は浅水管理とし、分げつの発生を促す
- 全層施肥の場合は早期追肥を田植え7日以内に施用する
- 田植後3日間はやや深水として活着を早める
- 一株の植付け本数は　3～4本とし、3㎝程度の深さに植える
- 5月　10　日頃を中心に田植を行い荒天時の田植は避ける
- 田植機の株数設定は　70　株/坪　に設定して作業を行う
- 苗箱施薬剤は育苗ハウスの外で散布する
- 病害虫予防のため苗箱施薬を行う
- 天候に合わせた温度管理を確実に行う
- 播種量は乾籾で一箱当り　120　g以下としてよい苗を作る
- 田面の均平をよくする
- ゆっくりと耕起し、作土　15　㎝　以上を確保する
- 土づくり資材の散布